様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６７２６

研究課題名（和文）室町後期から江戸初期における絵巻作例の基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on Handscroll Painting Examples from the Late Muromachi to Early Edo Periods

研究代表者
土谷　真紀（Tsuchiya, Maki）

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：８０７５７４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、16世紀末期から17世紀初頭に制作された絵巻と関連する作例の調査分析を通して、中近世移行期における絵巻の画風と物語絵画としての特徴を検証した。調査した絵巻作例は、いずれも絵師を特定することは難しいものの、室町後期に制作された土佐派や狩野派の手になる絵巻の表現を踏まえ、いくつかの作例では狩野派絵巻の要素が継承しながらも、近世の絵巻に頻出する、本の挿絵のような画面を多く見せ、物語の表現において転換期にあることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本美術史において、16世紀後半から17世紀初頭という中世末期から近世初頭への移行期に制作された絵巻作例に関する関心は低く、基礎的な研究は少なかった。本研究は、当該時期に制作された作品を分析し、各作例の画風と物語絵画としての特徴を提示した。特に、特定の画派へ帰属させることが難しい佚名絵師が制作した作品を分析することで、流派に軸を置いて理解を進めがちな美術史研究へ複層的な分析視点を提供した点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：　This study surveys and analyzes examples of handscroll paintings and related works created between the late 16th to early 17th centuries, and through this analysis studies handscroll painting style and narrative picture characteristics during Japan's transition from its medieval to pre-modern periods. All painted by hard to specifically identify painters, the handscroll paintings surveyed in this study were based on the handscroll painting expression found in late Muromachi period works by Tosa and Kano school painters. Several of the surveyed works continue elements of Kano school handscroll paintings, while at the same time often display scenes reminiscent of book illustrations like those found in Edo period handscrolls, indicating a transitional period in narrative expression.

研究分野：日本美術史

キーワード：狩野派　絵巻　土佐派　模本　金山天王寺　秀次公縁起　法師物語絵巻　涅槃図

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

室町時代の土佐派と狩野派に関する研究は、彼らを画壇の中心に至らしめた作品の分析を主軸にこれまで進められてきた。土佐派においては「やまと絵」の領域にある絵巻、肖像画の諸作を中心に、狩野派においては、「漢画」の領域にある水墨画の諸作、障屏画のような大画面作例、扇面といった幅広い画域を誇った彼らの諸作例について基礎研究が重ねられてきた。そして、極めて幅広い画域を誇った狩野派の二代目である狩野元信（1476－1559）が、室町後期に「和漢統合」「和漢融合」を成したとし、元信の重要性を提示するのが通説であった。これは日本美術における「和」の側面を土佐派に割り当て、「漢」の側面を狩野派に当てはめることにより、相互補完的に両者があるという認識に基づいたもので、1691 年刊行の画論書『本朝画史』の認識が現在もなお根付いた形で室町期の美術は分析されてきた。

しかし近年、この「和漢」の概念について活発な議論がなされている。島尾新『『和漢のさかいをまぎらかす』―茶の湯の理念と日本文化』（淡交社、2013 年）では、日本における「和」の世界が、前代まで「漢」であったものを包含しながら、時代が変わるごとに、新たな「漢」を見出して、受容者側が取捨選択する様子を検証し、渡邊雄二「近世狩野派絵画の『漢』画考」（下原美保編『近世やまと絵再考－日・英・米それぞれの視点から』ブリュッケ、2013 年）では、江戸時代における画論書のなかで、『本朝画史』だけが「漢画」という語を用いていることを指摘し、現代における「漢画」＝狩野派という理解について警鐘を鳴らしている。さらに室町期における絵巻の動向については、髙岸輝が「十六世紀やまと絵様式の転換」（『文学』13－5、岩波書店、2012 年 9・10 月）や「研究ノート 中世後期絵巻の様式展開」（『美術史論叢』29、2013 年）において、ある種の古典回帰ともとれる傾向が土佐派や狩野派の絵巻作例から看取されるとする。

室町期における「和漢」の概念やそれに関する作品を見直す動向は、その多くが 16 世紀半ばまでにとどまり、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけての「絵巻」の実態に言及することは少ない。一方で、近世初頭以降の「絵巻」をはじめとした、物語絵画をめぐる分析は、積極的に行われている。

これまで、室町後期の絵巻については、土佐光信や土佐光茂、狩野元信による絵巻作品群の分析が重ねられてきたが、それ以外の作例については、ほとんど分析されていなかった。つまり、土佐光信、狩野元信といった著名な絵師が直接手掛けた作例であることに重きがおかれ、絵師がたちどころに確定できない作品については等閑視されていたのである。しかしながら、これら佚名絵師による作品は、当該時期の絵巻の実態を読み解く突破口として極めて大きな可能性を有している。そこで、これらの室町後期以降から近世初頭の絵巻に範囲を絞り、絵巻を描いた絵師を土佐派、狩野派、そしていずれにも属さない絵師に分類して、作品の調査と分析を行い、当該時期の絵巻における様式、物語表現の方法などを明らかにしようと考えた。

２．研究の目的

室町時代後期から江戸初期にかけて制作された「絵巻」作例の実態を、基礎的な分析よって明らかにし、「絵巻」における中世後期から近世初頭における物語の表現方法を解明し、美術史の中で位置づけることを目的とする。物語絵画の享受層が拡大化する当該時期において、「絵巻」という媒体が獲得し、また失った機能について、さらに「絵巻」という画面形式における物語表現の方法について、作品調査を踏まえた知見を基に歴史学、文学など周辺領域の研究成果を援用しながら検討する。検討によって得られた結果から、これまで等閑視されてきた作品群の位相、価値について総合的に提示することを目指す。

３．研究の方法

本研究では室町後期から江戸初期にかけて制作された絵巻作例の中でも、分析の少ない作品を調査し検証することにより、当該時期における物語の表現方法を解明し、絵画史、絵巻史の中で位置づけると同時に、中世から近世への転換期における絵巻作品群が、どのような機能を担っていたのかを明らかにすることを目指し、以下の方法によって進めることとした。

（１）国内の諸機関における作品の調査
（２）各段の内容把握および画面分析、詞書分析
（３）様式史の中での位置づけ
（４）（絵師不明作品の場合）同時期の主要画派作例との比較検討
（５）各作品における図像典拠の解明、意味の考察
（６）当該時期における絵巻作例の意義と機能の考察

研究を進めるにあたり、当該時期の絵巻の担い手として以下の三つの層を設定し、調査作品を選定した。

（１）土佐派：やまと絵系絵師であり、絵巻作家としての地位をすでに確立。
（２）狩野派：15 世紀半ばから登場し、近世初頭には画壇の中心に躍り出るが、絵巻作家としての蓄積は土佐派に比べ浅い。
（３）その他の絵師：土佐派および狩野派のいずれか、もしくは両派を学んだ絵師、あるいはそれとは異なる基盤を持つ。

４．研究成果

本研究では、下記作例の調査によって得られた知見をもとに以下の成果を得ることができた。いずれも室町後期から江戸初期における絵巻作例や関連する作例である（記載は調査順）。
「秀次公縁起」（京都・瑞泉寺蔵）、「矢取地蔵縁起絵巻」（滋賀・個人蔵）、「関白草紙」（愛知・正法寺蔵）、「金山天王寺縁起絵巻」（京都・廬山寺蔵）、「金山天王寺縁起絵巻」（茨城・大覚寺蔵）、「大江山絵巻」「武蔵坊縁起絵巻」（ともにアイルランド、チェスター・ビーティー・ライブラリー蔵）、「仏涅槃図」（愛知・法海寺蔵）、「鞍馬蓋寺縁起絵巻模本」（個人蔵）、「鞍馬蓋寺縁起絵模本」（海の見える杜美術館蔵）、「蛙草紙絵巻」（根津美術館蔵）、「源氏物語屏風」、「平家物語絵巻貼交屏風」（ともに海の見える杜美術館蔵）、「星光寺縁起絵巻」（東京国立博物館蔵）

（１）豊臣秀吉の甥で、謀反の罪で切腹に処された豊臣秀次の事件を描く二つの絵巻（京都・瑞泉寺蔵「秀次公縁起」と愛知・正法寺蔵「関白草紙」）を比較し、画風の検証を行った結果、とくに「秀次公縁起」は、狩野光信の画風を知る絵師が想定された。描かれた場所についても具体性を伴った描写があり、豊臣秀次とその一族を祀った廟所（畜生塚）は、詞書に忠実、かつ洛中洛外図のなかでも堺市博物館本等に見られる描写と共通することを指摘した（土谷真紀「「秀次公縁起」と（京都・瑞泉寺蔵）と「関白草紙」（愛知・正法寺蔵）をめぐる一考察」『お茶の水女子大学人文科学研究』14、2018 年 3 月）。

（２）伝承絵師として土佐光信と狩野元信の名が見える「金山天王寺縁起絵巻」（京都・廬山寺蔵）と絵師不明の「金山天王寺縁起絵巻」（茨城・大覚寺蔵）を調査し、廬山寺本において狩野元信の若書きと住吉弘貫によって鑑定された段について分析した。その結果、狩野派に直結する絵師ではないものの、狩野派絵巻に見られる人物表現や彩色などを踏まえた狩野派絵巻の受容作として位置づけられることを指摘した（土谷真紀「京都・廬山寺蔵「金山天王寺縁起絵巻」の画風をめぐって」『お茶の水女子大学人文科学研究』16、2019 年 3 月）。

（３）チェスター・ビーティー・ライブラリー（アイルランド）に所蔵される「武蔵坊縁起絵巻」を調査し、画面の検証からハーバード大学フォッグ美術館（アメリカ）に所蔵される作例と一具であることを再確認した。そして、その画風に狩野派絵巻に由来する要素が見られることを、【頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム】の研究発表会にて「室町絵巻の記憶―チェスター・ビーティー・ライブラリー所蔵「武蔵坊縁起絵巻について」と題して発表、狩野派絵巻の要素を一部継承することを報告した（於アイルランド、2019 年 3 月 7 日）。

（１）から（３）により、室町最末期から江戸初期において、初期狩野派の手になる絵巻が佚名絵師の絵巻に受容され、作品に反映されていることが明らかとなり、元信次世代以降、狩野派の絵巻が土佐派のみならず周辺の絵師へも影響を及ぼしていることが確認された。

（４）「矢取地蔵縁起絵巻」（滋賀・個人蔵）、「金山天王寺縁起絵巻」（茨城・大覚寺蔵）、「蛙草紙絵巻」（根津美術館蔵）、「星光寺縁起絵巻」（東京国立博物館蔵）の熟覧を通じ、いずれも土佐派の画風を踏まえたやまと絵系作例でありながら、土佐光信もしくは土佐光茂とは異なる個性や特徴をもつことが確認された。

（５）土佐行広とその工房が関与したと想定される「仏涅槃図」（滋賀・興善寺蔵）について、「仏涅槃図」（愛知・法海寺蔵）のほか、関連する涅槃図作例を分析し、土佐行広の仏涅槃図の特徴を明らかにした（土谷真紀「仏涅槃図」『国華』1457、2017 年 3 月）。さらに、この知見もふまえ、「法師物語絵巻」を描いた絵師が土佐行広周辺である可能性が高いことを指摘し、受容層の考察を行った（土谷真紀「法師物語絵巻について」『国華』1478、2018 年 12 月）。土佐行広は 1406 年から 1451 年頃まで活動が確認されるが、室町中期以降の土佐派様式の基調となった絵師である。これらの分析により、土佐派絵巻の基本的な特質について再確認することができた。

（６）本研究を進めている中で、研究開始以前には全く想定していなかった作品を調査することができた。それは、狩野派が初めて手掛けた絵巻である「鞍馬蓋寺縁起絵巻」（1513 年、細川高国奉納）の模本である。「鞍馬蓋寺縁起絵巻」は原本が失われ、模本による分析されてきたが、これまで詞書と絵を完備する模本は知られていなかった。調査により、模本の中でも高い完成度を持つ作例であることが判明し、画面の分析から、「鞍馬蓋寺縁起絵巻」は狩野派の絵巻学習の過渡期にある作例であることを再確認した。この新たな模本から、狩野派において、「鞍馬蓋寺縁起絵巻」が「酒伝童子絵巻」（サントリー美術館蔵）や「酒飯論絵巻」（文化庁蔵）のように、模写するに値する重要な作例、規範性を持つ作例として、認識された可能性が高いことを指摘した（土谷真紀「新出の個人蔵「鞍馬蓋寺縁起絵巻」模本」『人文』17、学習院大学人文科学研究所、2019 年 3 月）。なお、この知見は、室町後期における初期狩野派絵巻の意義と影響を考察した単著（土谷真紀『初期狩野派絵巻の研究』青簡舎、2019 年 3 月）にも反映した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 土谷真紀	４．巻 16
２．論文標題 京都・廬山寺蔵「金山天王寺縁起絵巻」の画風をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://teapot.lib.ocha.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=42805&file_id=21&file_no=1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土谷真紀	４．巻 2
２．論文標題 『伝応永縁起』と『寛文縁起』の画風と画面について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 浅草寺什宝目録	６．最初と最後の頁 185-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土谷真紀	４．巻 17
２．論文標題 新出の個人蔵「鞍馬蓋寺縁起絵巻」模本	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文	６．最初と最後の頁 378、348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土谷真紀	４．巻 1478
２．論文標題 「法師物語絵巻」について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国華	６．最初と最後の頁 7、23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土谷真紀	4．巻 14
2．論文標題 「秀次公縁起」(京都・瑞泉寺蔵)と「関白草紙」(愛知・正法寺蔵)をめぐる一考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10083/00062201	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土谷真紀	4．巻 1457
2．論文標題 仏涅槃図	5．発行年 2017年
3．雑誌名 國華	6．最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 土谷真紀
2．発表標題 室町絵巻の記憶―チェスター・ビーティー・ライブラリィ所蔵「武蔵坊縁起絵巻」について
3．学会等名 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラムによる研究発表会
4．発表年 2019年

1．発表者名 土谷真紀
2．発表標題 『鞍馬蓋寺縁起絵巻』新出模本の紹介と考察
3．学会等名 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラムによる国際ワークショップ　西欧の日本学研究者とのネットワークを通じた日本人若手研究者の国際化 ―絵写本・版本研究を中心として
4．発表年 2018年

１．発表者名 土谷真紀
２．発表標題 転換期の絵巻―「秀次公縁起」（京都・瑞泉寺蔵）と「関白草紙」（愛知・正法寺蔵）をめぐって
３．学会等名 【頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム：室町後期から江戸期の絵写本・版本研究を通じた日本学研究と西欧とのネットワーク構築】による国際会議＜文化創造の図像学＞
４．発表年 2018年

１．発表者名 土谷真紀
２．発表標題 伝承絵師は何を示すのか―金山天王寺縁起絵巻を例に
３．学会等名 科学研究費補助金・基盤研究（Ｂ）（研究代表・佐野みどり）「中近世絵画における古典知の変成と再結晶化―話型と図様」による国際シンポジウム＜フレームとしての超域文化学―フレームとしての古典―＞
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 土谷真紀	４．発行年 2019年
２．出版社 青簡舎	５．総ページ数 439
３．書名 初期狩野派絵巻の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考